

松譽著 『翻迷開悟集』 における 『邪正問答』 への反駁

『法華経』 解釈を中心に――

庵 谷 行 遠

一 はじめに

八代問答といわれる論争は、貞享元年（一六八四）七月、真宗の夢伝（生没年不詳）と日蓮宗の学僧との肥後国本成寺における問答である。その時の記録は『邪正問答』二巻（貞享元年（一六八四）刊行）に記されている。

この『邪正問答』に対し、浄土宗からは松譽（生没年不詳）が『翻迷開悟集』五巻（正徳二年（一七二二）刊行）を著し反駁を加えた。^①

『翻迷開悟集』は、その後、法華側対大心海義教（一六九四―一七六八）との法論に発展していく端緒の書物であり、浄土側の学僧からの反駁としては初期のものである。従ってその後の宗論の展開に関して重要な役割を担っている。

そこで小稿では、松譽が記した『翻迷開悟集』における『邪正問答』への反駁について検討する。特にその主要な反駁が示される箇所として、『法華経』解釈に注目する。すなわち

『法華経』安樂行品における念仏や薬王菩薩本事品における阿弥陀仏という経説に対し、松譽は、阿弥陀仏はいずれの経においても一体であると主張するのである。このような『翻迷開悟集』における『邪正問答』に対する反論を検証し、近世における日蓮教団と他宗との宗論の一端を明かす。

二 『法華経』安樂行品における念仏の解釈

『法華経』安樂行品には「不^②独入^③他家、若有^④因縁^⑤須^⑥独入^⑦時、但^⑧一心念^⑨レ仏。」と「入^⑩レ里乞食、将^⑪一比丘。若無^⑫比丘、一心念^⑬レ仏。」の经文がある。

この『法華経』安樂行品における念仏に対して、松譽は『翻迷開悟集』巻二において次のように述べている。

奉^⑭法華經中有^⑮念仏文^⑯責^⑰日党局情^⑱破折。諸經涉広説玉念仏ハ皆
 弥陀念仏ナルヘシ。(中略) 此念仏、諸仏ニ互ヘシト雖、正弥陀念
 仏可^⑲用^⑳。

松譽著『翻迷開悟集』における『邪正問答』への反駁（庵谷）

このように、諸経に互って広く説かれる念仏は、皆阿弥陀仏に対する念仏であり、『法華経』における先の念仏も阿弥陀仏を念じることであると捉えるのである。

その根拠として、次の『摩訶止観』・『止観輔行伝弘決』・『大智度論』・『仏藏経』・『大方広仏華嚴経』・『大方広仏華嚴経疏』等の経論を援用している。

そこで、それぞれの典拠となる記述を確認する。

『摩訶止観』卷二上には次の記載がある。

一常坐者、出_二文殊説・文殊問_一般若。名為_二一行三昧_一。今初明_二方法_一、次明_二勸修_一。方法者、身論_二開遮_一、口論_二説黙_一、意論_二止観_一。身開_二常坐_一遮_二行・住・臥_一。或可_レ処_レ衆、独則_レ弥善。居_二一静室、或空閑地_一。離_二諸喧鬧_一、安_二一繩床、傍無_二余座_一。九十日為_二一期_一、結跏正坐。項脊端直、不_レ動、不_レ揺、不_レ萎、不_レ倚。以_レ坐自誓、肋不_レ拄_レ床。況復_レ屍臥、遊戯住立。除_二經行・食・便利_一。随_二一仏方面、端坐正向。時刻相続、無_二須臾廢_一。所_レ開者專坐。所_レ遮者勿_レ犯。不_レ欺_レ仏、不_レ負_レ心、不_レ誑_二衆生_一。⁽⁵⁾

ここには、一仏の方面に随って、端坐して正しく向う、という一文がある。ただし、ここでは何れの仏とも限定していない。一方、湛然は『止観輔行伝弘決』卷二において『摩訶止観』の当該箇所に対して、随向の方は正に西であって、諸教に讚する所は多く阿弥陀仏にあり、故に西方を一つの基準とすると語釈している。⁽⁶⁾

次に、『大智度論』卷二一の「行得者、如_三此閻國中、学_二念仏三昧_一。果報得者、如_二無量寿仏国人、生便自然能念仏_一。」と卷二九における「如_二般舟三昧中説_一、菩薩入_二是三昧_一、即見_二阿弥陀仏_一。便問_二其仏、何業因縁故、得_レ生_二彼国_一。仏即答言、善男子。以下常修_二念仏三昧_一、憶念_{不_レ捨}。廢故、得_レ生_二我国_一。」⁽⁸⁾という二か所の阿弥陀仏に関する記述を松譽は論拠としている。つまり、阿弥陀仏の国に生れた人は自然に仏を念じ、念仏三昧に入れば阿弥陀仏に見えるという論を引用しているのである。ところで、『翻迷開悟集』では『大智度論』卷二九における「是三昧」の下に「念仏」、また、「我国」の下に「西方」とそれぞれ割注を付けて強調している様が見て取れる。⁽⁹⁾

また『仏藏経』卷一には次の经文がある。

無_レ覺、無_レ観、寂然無想、名為_二念仏_一。何以故。不_レ応_下以_二覺観_一憶_レ念_二諸仏_上。無_レ覺、無_レ観、名為_二清浄念仏_一。於_二此念中_一乃無_二微細心・心念業_一。況身口業。又念_二仏者、離_二諸想_一。諸想不_レ在_レ心、無_二分別_一、無_二名字_一、無_二障礙_一、無_レ欲、無_レ得、不_レ起_二覺観_一。何以故。舍利弗。随_レ所_レ念起一切諸想、皆是邪見。舍利弗。随_二無所有_一、無_レ覺、無_レ観、無_レ生、無_レ滅。通_二達是_一者、名為_二念仏_一。如_レ是念中、無_レ貪、無_レ著、無_レ逆、無_レ順、無_レ名、無_レ想。舍利弗。無_レ想、無_レ語乃名_二念仏_一。⁽¹⁰⁾

『翻迷開悟集』が証左としてしているこの『仏藏経』の言説は、仏を念ずることについて詳述している箇所であるが、阿弥陀

仏や西方という事柄については言及していない。

同様の事例は華嚴經典についても看取される。すなわち、『大方広仏華嚴經』卷一一（八十『華嚴』）には「大威光童子、見_下彼如来成_二等正覺_一、現_中神通力_上、即得_二念仏三昧_一。名_二無辺海藏門_一。」とあり、澄觀の『大方広仏華嚴經疏』卷一二には「一念仏三昧者、菩薩之父、故首明_レ之。乃至十地不_レ離_二念仏_一。」とある。阿弥陀仏や西方という事柄についての言及がない点は『仏藏經』の經文と同じである。

以上の經論を踏まえて、松譽は『翻迷開悟集』卷二に次のように記述している。

是等ノ証ヲ以テ見ルニ、念仏ト者、弥陀ノ称名念仏也。故広ク諸經ニ説キ玉フ処ノ念仏ノ言ハ、皆弥陀可_レ局。況法華於弥陀念仏義、所説玉ヘルコト必定也。¹¹⁾

このように、念仏とは阿弥陀仏の称名念仏を指し、従つて、諸經に説く所の念仏は皆、阿弥陀仏に限り、当然、『法華經』における阿弥陀仏も、浄土教の阿弥陀仏に他ならないと主張する。しかし、注目すべき点は、『仏藏經』『華嚴經』などの經論からは「念仏すなわち阿弥陀仏の称名」とは直接読み取ることとは難しいと思われる典拠を掲げていることである。それにもかかわらず、これらの証文を見ると、皆、念仏は阿弥陀仏の称名であることは必定であると松譽は断言している。

松譽著『翻迷開悟集』における『邪正問答』への反駁（庵谷）

『邪正問答』には念仏と阿弥陀仏との関係について、特段項目をたてて議論しているわけではなく、松譽が自ら主張を展開し始めた話題である。このような見解を導き出した理由は、諸經に説かれる阿弥陀仏は、総じて同一の阿弥陀仏であり、諸經の念仏も総て阿弥陀仏の称名念仏であるという結論へ結びつけるためであると考えられる。

三 『法華經』薬王菩薩本事品における阿弥陀仏の解釈

『法華經』薬王菩薩本事品には次の經文がある。

若有_二女人_一、聞_二是薬王菩薩本事品_一、能受持者、尽_二是女身_一、後不_二復受_一。若如来滅後後五百歲中、若有_二女人_一、聞_二是經典_一、如_レ説修行、於_レ此命終、即往_二安樂世界、阿弥陀仏大菩薩衆圍繞住_一、生_二蓮華中宝座之上_一。¹²⁾

この經説について『邪正問答』は、『法華經』薬王品の阿弥陀仏は浄土の經典に説かれる十劫正覺の阿弥陀仏ではなく、その行法も『法華經』を説の如く修行することであつて称名念仏の行ではないとする。『邪正問答』卷上には次の記述がある。

薬王品ノ文ハ法華經ヲ説ノ如ク修行スル行者ノ事ニシテ、全ク称名念仏ノ行ニ非ズ。十劫正覺ノ弥陀ニアラズ。（中略）爾前方便ノ三部經等ニハ此娑婆ヲ離レテ遙ニ十萬億土ヲ過テ、他方ノ国土ニ往テ

松譽著『翻迷開悟集』における『邪正問答』への反駁（庵谷）

生ルルト説ケドモ、法華真実ノ意ハ娑婆即チ安樂世界ナルコトヲ即往安樂世界ト説キ玉ヘリ。⁽¹⁵⁾

『邪正問答』がこのように言明するのは、次の『法華文句記』卷一〇下の記述を基としているためである。

經云ニ若有女人等⁽¹⁶⁾者、此中祇云ニ得聞是經如説修行。即淨土因不⁽¹⁷⁾須⁽¹⁸⁾更指⁽¹⁹⁾觀經等⁽²⁰⁾也。

この叙述に対して、松譽はあくまで阿弥陀仏は一体であり、修行者の観点から異なりがあるに過ぎないと述べ、『法華經』における阿弥陀仏も捨てることはないと言及する。『翻迷開悟集』卷三には次のような記載がある。

爾前方便三部經等言、淵海巧也。(中略) 弥陀何經説玉テモ一体ナルベシ。(中略) 妙樂疏記判釈異体アルニ非ス。弥陀ハ一体ナレドモ、能修行者機前ニ約云。夫法華如説修行以極樂往生。淨經十六觀以安養往生云リ。但弥陀非⁽¹⁶⁾謂⁽¹⁷⁾異仏。修行少違アルヲ以ノ故ニ今、不須更指觀經云リ。若一仏ナラバ、豈捨⁽¹⁸⁾法華弥陀。是同中有⁽¹⁹⁾異、唯自余諸行廢センガ為ニ捨閉閣抛云リ。⁽²⁰⁾

松譽はさらに「觀經ト弥陀經トハ、法華ト同ジ醍醐味ノ經也。」⁽¹⁸⁾と考へ、ひいては「往生ト成仏ト一同」⁽¹⁹⁾とさえ言明するのである。このような松譽の往生・成仏の理解は、『法華經』藥王菩薩本事品に加え、『大方広仏華嚴經』卷四〇（四十）『華嚴』入不思議解脱境界普賢行願品と『法華經』提婆達多品の⁽²¹⁾

經文から導き出されるようである。この提婆品の經文に対して、松譽は往生と同じであると付言し、『仏説無量壽經』にも「蓮華」⁽²²⁾や「化生」⁽²³⁾の語があることから、諸經に説かれる成仏・蓮華化生は皆、阿弥陀仏の極樂往生に他ならないと断定し、次のように結論付ける。

成仏トハ天地碩異スルヤ。(中略) 往生成仏者、聖道・淨土二門中於テ、傍正分別有耳。⁽²⁴⁾

このように成仏と往生はかけ離れたものではなく、聖道門・淨土門の二門において分別しているに過ぎないと唱え、成仏と往生は同一線上にあり、先の念仏の解釈と同様に総て阿弥陀仏に包括されると論じるのである。

四 おわりに

以上、『翻迷開悟集』における『法華經』安樂行品における念仏の解釈と、藥王菩薩本事品における阿弥陀仏の解釈に注目して『邪正問答』への反駁について考察した。全体として理論としては複雑ではなく、主張する内容は、諸經における念仏・往生・阿弥陀仏等は総て淨土經典に説かれるものに帰結するということである。

ただし、『邪正問答』への反駁として論証する過程は、概してやや感情的であり、諸大乘經に往生の説があるから皆一体

の阿弥陀仏であると、強引に結論付ける向きがあり、いささか粗雑な理論展開に感じられる。

近世における日蓮教団と他宗との宗論を検討するに当たっては、論争の相手側の著作にも注意を払う必要がある。

- 1 稲田海素「日蓮宗論書解題」(『大崎学報』第二三号、一九一〇)に『翻迷開悟集』についての言及がある。ただし、著者の松誉については、なお検討が必要である。
- 2 大正九・三七頁中。
- 3 大正九・三七頁下。
- 4 二五丁左(二六丁右)。
- 5 大正四六・十一頁上中。
- 6 大正四六・一八二頁中下「随一仏方面等者、随向之方、必須正西。若障起念レ仏所向便故。経雖レ不レ局、令レ向レ西方。障起既令専称レ一仏。諸教所レ讚多在レ弥陀。故以レ西方レ而為レ一準。」
- 7 大正二五・二二二頁中。
- 8 大正二五・二七六頁上。
- 9 卷二・二六丁右左。
- 10 大正一五・七八五頁中。
- 11 大正一〇・五六頁中。
- 12 大正三五・五八六頁下。
- 13 二七丁右左。
- 14 大正九・五四頁中下。
- 15 一一丁左。
- 16 大正三四・三五五頁中。

松誉著『翻迷開悟集』における『邪正問答』への反駁(庵谷)

17 二丁左。

18 『翻迷開悟集』卷四・一九丁右。

19 『翻迷開悟集』卷四・三〇丁右。

20 大正一〇・八四八頁上「面見レ彼仏阿弥陀、即得レ往レ生安樂刹。我既往レ生彼国レ已。」

21 大正九・三五頁上「若生レ人天中、受レ勝妙樂、若在レ仏前、蓮華化生。」

22 大正一二・二七四頁上。

23 大正一二・二七二頁中。

24 『翻迷開悟集』卷四・三〇丁右。

〈参考文献〉

山口晃一編『日蓮教学全書』続宗論部八(法華ジャーナル、一九八四)

『日本仏教典籍大事典』(雄山閣、一九八六)

稲田海素「日蓮宗論書解題」(『大崎学報』第二三号、一九一〇、六七―七四頁)

〈キーワード〉 松誉、『翻迷開悟集』、『邪正問答』、『法華経』

(早稲田大学大学院)